

学 位 論 文 題 名

万葉集と中国文学の比較研究

－ 歌と散文と漢語の表現論 －

学位論文内容の要旨

万葉集は現存最古の和歌集であるが、万葉時代の日本人は独自の文字を持たなかったため、題詞・左注等の漢文はもとより、和歌自体もすべて漢字で書かれた。ここに、和歌（やまとことば）の表現に対する漢語・漢文表現のさまざまな関与・影響が生じた。また題詞・左注等の漢文にあっては逆に、その表現においてしばしば日本化したある種の偏差を生みだした。本論文は、これらのような点に注目して万葉集の和歌・散文の表現に比較文学的な立場から検討を加え、万葉人の表現における漢文学（漢字・漢語）の摂取と創造の実態を追求せんとしたものである。こうした研究方法は、つとに契沖（『万葉代匠記』）岸本由豆流（『万葉集攷証』）等により試みられ、長い伝統をもつが、馬氏はとくに、故小島憲之氏等によっておしすすめられた文献学的実証主義に立脚する出典論・典拠論の方法に学び、漢籍の広範囲かつ丹念な調査をもとにして、万葉集の和歌・散文の表現に新しい角度から照明をあてようと試みている。

第一部の各章は、和歌の歌語――その訓詁・解釈――や作品の発想などの比較文学的視点からの究明をめざした論で、馬氏の本領の最もよく発揮された部分といえる。第一章「鹿鳴」では「鹿」の字をカ・シカ・シンなどにどう「訓みわけ」するか（第一節）、また「鳴く鹿」を素材とする万葉歌の発想に漢土の「鹿鳴」詩がどうかかわっているか（第二節）を論じている。とくに後者に比較文学的視点が生かされ、万葉歌における「鹿鳴」詩の受容が、君臣和楽的なタテ関係に関わるものと、朋友交歓といったヨコ関係に関わるものとの二面にわたることを明らかにしている。第二章「怨恨歌」では巻三所収の同伴坂上郎女の特異な長歌作品を対象に、歌語「磨ぎし心」の語義（第一節）、「幼婦」の訓義（第二節）を問題とする。前者は結局出典論の見地から従来の対立説の一方を補強したにとどまるが、後者は、この語の用例が特定の故事にまつわってのみ現れるという、きわめて特異な偏りを見せることを、初めて明らかにしたもので、出典論に新しい照明をあてている。また第三章「枕詞」では、「泣く子なす」「垣ほなす」の二語について漢語の影響を検討することにより、その語義を明らかにすることにつとめている。

第二部の各章は、長大な題詞・左注を有する作品をあつめた万葉集でも特異な性格の巻十六について論じたものである。第一章「『由縁』と『有由縁歌』考」は、この巻の表題として用いられている「由縁」の語義の検討（第一節）と各作品の有する「由縁性」の究明（第二節）とからなる。とくに前者は、従来の研究を一步すすめたものと評価できる。また第二章「『有由縁歌』の散文」では、その構成の類型と、そうした類型をささえるさまざまな措辞について検討する。このうち第一節は、比較研究の観点からはやや離れたきらいもあるが、第二節は多くの有効な分析を含み、新視点を提供するものと評価できる。

第三部の各章も、ひきつづき巻十六を対象とするが、ここでは「壮士」「美人」あるいは「断腸」「可怜」また「怨恨」等、同巻の散文中に用いられている語彙（漢語）の諸相を、漢籍の用例に徴して検討しており、とりわけ、万葉人が漢語を受容した際のいわゆる「和習」の問題に注意をむけている。「哀慟」に関する先行説の批判や「口号」の語義の再検討にみられるように、漢籍の渉獵と万葉集の用例の比較とが功を奏している場合が少なくない。

なお、本論文の構成の概略は以下の通りである。

（全200ページ：400字詰換算約780枚）

序の部 目的と方法

第一部 歌の表現

第一章	鹿鳴歌
第二章	怨恨歌
第三章	枕詞
第二部	卷十六の散文
第一章	「由縁」と「有由縁歌」考
第二章	「有由縁歌」の散文
第三部	卷十六の漢語
第一章	人物に関するもの
第二章	心情に関するもの
第三章	歌作状況に関するもの
結の部	まとめと課題

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽
副 査 教 授 宮 澤 俊 雅
副 査 教 授 南 部 昇
副 査 教 授 須 藤 洋 一

学 位 論 文 題 名

万葉集と中国文学の比較研究

－ 歌と散文と漢語の表現論 －

審査委員会は、本論文が提出されて以後、たびたび委員会を開催し、論文を精読し検討を重ね、また口述試験を実施し、その結果について審議し、適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、馬駿氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達し、文学研究科委員会に報告した。研究科委員会はこの報告に基づき慎重な審議を重ね、これを承認したものである。

本研究のような典拠論・出典論的比較研究は、現今の万葉学界にも勢力を有する、いわゆる主題論的比較研究が、ともすれば主観的な印象批評に流れやすいという面があるのに対して、地味ではあるが着実な成果の期待できる、実証的な研究分野といえるであろう。ただ、そのためには、あくまでも厳密にして細心の研究方法が要求されるのであるが、本論における馬氏の研究は、その要求水準によくこたえていると判断される。膨大な量にのぼる秦漢から六朝、唐代にいたる漢籍――なかにはまだ索引などの整備されていない作品も少なくない――を丹念に調査し、それと万葉集の歌語・漢語の表現とを逐一ひきくらべるという、多大な時間と労力とを要する作業を根気よくまた精密に積み重ね、多くの新見を導き出している。第一部および第三部の各章における個々の語彙や発想等に関する研究においてとくにそれが顕著だが、第二部で展開された巻十六論のような文体論的な見地からの検討なども、従来必ずしも十分な成果があがってはいない分野であっただけに、画期的な労作とみとめられるであろう。本研究は、こうした点に関し多くの新見を呈示し、今後の万葉集研究に寄与するところが少なくない。本研究によって、訓詁・解釈が改められるべき作品はかなりの数にのぼるであろう。

むろん、本研究にも、今後の課題とすべき点はある。異文化接触のまさに最先端の事象を扱うこの様な研究には、複雑かつ微妙な文学事象に対処し、それを的確に処理する繊細な感覚と、柔軟で複線的な思考力が要求される。単純な比較から性急に直接の典拠・出典を求めてしまうことは危険である。結論的にはそれが正しいと思われる場合でも、より精密な論証過程を必要とする場合が少なくない。典拠論・出典論がしばしば陥りやすい危険はそうしたところにある。

また、そうした点からみたとき、単純な典拠論・出典論もさることながら、今後の課題として最も大きなもの、そして新しい成果が期待されるものは、氏自身も「まとめと課題」（結の部）で述べていることであるが、「和習」についての考察をより深めることであろう。さいわいにして、馬氏は本研究を通じてその端緒をすでにつかみえていると思われるので、今後の研究の進展に十分に期待できると思われる。